

平成30年

3月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

(果樹) 東予地方局産業振興課産地育成室

(畜産) 東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0898) 68-7322(代)

TEL (0897) 57-9122

【天気予報】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。降水量は、平年並みまたは少ない確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2015年	9.0	13.4	4.9	140.5
2016年	9.8	14.6	5.5	82.5
2017年	8.5	13.1	4.5	56.5
1981~2010年	9.0	13.1	5.0	91.5

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】

1 麦

(1) 穂肥

施肥時期は、11月中・下旬播種のチクゴイズミで出穂前25~20日(3月中旬頃)、ハルヒメボシで出穂前30~25日(3月上旬頃)頃が適期です。

施肥量は、葉色と生育量(草丈、茎数)を見て、しあわせ化成を15~20kg/10a施用して下さい。

(2) 排水溝の点検

春先の降雨による根痛みは、収量や品質を大幅に低下させる原因となります。排水溝の点検・作溝を行い、雨水の排出促進に努めて、湿害を防止して下さい。特に、排水溝は必ず圃場の外まで導いて、雨水を排出して下さい。

(3) 赤かび病の防除

赤かび病は開花から約10日間が最も感染しやすく、この時期に温暖(気温15°C以上)で連続降雨があると発生が多くなります。そのため、防除適期は開花期(通常、出穂期の5~7日後)で、この時期の防除は必ず実施して下さい。

また、1回目の防除後も温暖多雨で多発が予想される場合には、7~10日後に2回目の防除が必要です。薬剤は1回目は小麦・裸麦ともトップジンM水和剤1,000~1,500倍、2回目は小麦はトップジンM水和剤、裸麦はトリフミン水和剤1,000~2,000倍を散布して下さい。

2 水稻(雑草の総合防除)

難防除雑草のオモダカ、コウキヤガラ等は単一除草剤の一時期処理では完全に防除することは困難で、耕種的な防除(水稻収穫後の水田の排水による乾田化や冬期耕起、畦畔の除草等)と除草剤の体系処理を組み合わせた総合的な防除を繰り返すことが大切です。

<山橋>

【野菜】

1 さといも

(1) 種芋消毒

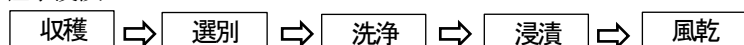
安定・高品質生産のために、種芋消毒を実施して下さい。

ア 薬剤名

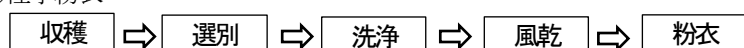
薬剤名	病害名	使用方法及び注意事項
ベンレートT水和剤20	黒斑病	20倍 1分間 又は、 種芋粉衣(種芋重量の0.4~0.5%)

イ 消毒方法

①種芋浸漬



②種芋粉衣



③種芋浸漬・粉衣処理のポイント

収穫…種芋確保する圃場は、疫病・乾腐病・軟腐病の発病が少ない圃場を選定して下さい。

選別…劣化・腐敗していない種芋(200~250kg/10a)を、子芋と孫芋に選別します。

洗浄…種芋の表面に土が付着していると、消毒液が種芋に付着しないので、洗浄して土を落として下さい。

浸漬…種芋を20倍・1分間浸漬後、良く乾かしてから植付けして下さい。

粉衣…種芋を、乾かしてから均一につくよう少量ずつ粉衣します。

④注意点…種芋浸漬・粉衣を行う場合、必ずマスクを着用して下さい。

(2) 植付け準備~植付け作業

ア 畝立ては畝幅110~115cmで土入れ出来るように台形に畝を成型します。

イ マルチングは、畝に適度な水分がある状態で、黒マルチを被覆します。

ウ 植付けは、株間33~35cm、深さ15cm程度とし、植付ける深さが深すぎると萌芽が遅くなり、浅いと芋の品質が低下したり芽つぶれ症が発生します。

(3) 害虫対策

ア コガネムシ類幼虫の被害が多い圃場は、必ず植付け前にダイアジノンSLゾル(50倍、1000/10a)を散布し、速やかに土壌混和します。

イ アブラムシ類対策で、植付け時にアドマイヤー1粒剤(4kg/10a)を植溝に土壌混和します。

(4) 疫病対策

圃場に放置されている親芋等残さは、速やかにロータリーで粉砕して下さい。

2 やまのいも

(1) 種芋準備・消毒

ア 無病で優良な種芋(200~250kg/10a)を準備して下さい。

イ 蔓首を切り除き、1個切片芋が50g程度になるように切断します。

ウ 種子消毒は、青かび病対策のためにベルコートフロアブル(200倍、10分間浸漬)して下さい。

(2) 植付け作業

2条植えは、畝幅110~125cm・株間33~40cmの2条千鳥植え。

1条植えは、畝幅100~110cm・株間25~30cm。

(3) 害虫対策

ア コガネムシ類幼虫の被害が多い圃場は、必ず植付け前にダイアジノンSLゾル(25倍、1000/10a)を散布し、速やかに土壌混和します。

イ タネバエ対策で、植付け時にフォース粒剤を4kg/10aを植溝に土壌混和します。

<越智>

【果樹】

1 せん定

(1) 温州みかん

みかんは、高品質な果実を数多く着果させるために亜主枝は水平からやや下向きに配置し、側枝や結果母枝は込み合った部分の立ち枝を基から間引いて柔軟な樹形を目指します。

結果母枝が多く着花が多いと予想される樹は、せん定は早めに行い発芽までには終えるようにします。切返しや予備枝を設定し、春枝(発育枝)と着花量のバランスを整えます。

昨年産の着果が多く、結果母枝が少ない樹は、せん定の実施は遅めで程度は軽く、着花確保に努めてください(着花確認後の軽いせん定でも可)。

(2) 中晩柑類

樹勢を保ち、樹冠内部まで日が当たるように独立樹を目指します。同年枝や競合枝の整理、亜主枝上の立ち枝・下垂枝の除去、外に伸びすぎた枝の追い込みなど樹の骨格を整えるとともに、樹勢が低下している場合は、切返し剪定で強めの新梢の発生を促します。

2 春肥

春肥は、新梢の充実、開花結実促進、幼果肥大に不可欠なので、発芽前にしっかりと施します。なお、有機率が高い肥料の場合は、やや早めに施用して下さい。

3 病虫害防除

マシン油乳剤の散布は、発芽前の3月中旬頃までに実施して下さい(但し、厳寒日は散布しない、冬期に2度散布しない)。散布濃度は95%製剤45倍(樹勢が弱い樹では97%製剤60倍が適当)ですが、商品により登録内容が異なるので使用時に農薬ラベル表示を必ず確認して下さい。

かいよう病に弱い甘平等の品種では、せん定時に罹病した枝葉を除去し、園外へ搬出して処理します。また、発芽前までにICボルドー66D(マシン油乳剤を散布する場合は2週間以上空ける)を散布して下さい。

4 苗木・穂木の取り扱い

苗木・穂木は、正規に購入したものか、それから自家増殖したものに限り自家農園で栽培することができます。登録品種の苗木・穂木を他人に無償譲渡、または販売することは種苗法で禁止されています。

<本田>

【花き・花木】

1 シキミの定植と防除

日当たりと排水の良い圃場を選び、pH5.5~6.0の弱酸性土壌にしておきます(苦土石灰60kg/10a)。直径60cm×深さ30cm程度の穴を掘り、根を広げ根の間に土が入るように定植します。栽植密度は44~55本/a(株間120~150cm×条間150cm)です。

冬期にマシン油乳剤を散布していない圃場は、芽が動き出す前までに規定の希釈倍率(アタックオイル100倍)で散布して下さい。3月下旬にダイリーク粒剤を12kg/10a散布し、アブラムシの防除をして下さい。また、生育が悪い圃場では、MB粒状固形を20kg/10a施肥し樹勢を回復させて下さい。

2 アネモネ・ラナンキュラスの摘花

球根肥大のため、花はすべて刈り取り、圃場の外に出します。

<日野>

【畜産】

(ハエの発生を初期から予防しよう)

ハエが活動し始める時期となりました。ハエの防除対策でもっとも有効なのは発生源となる糞の除糞であり、定期的な除糞が最重要ポイントです。

ハエの生態を一般的なイエバエを例にみると、成虫は1匹当たり50~150個、一生の間に約500個を産卵します。産卵された卵は春で3日、夏季は約1日ほどで孵化し、幼虫(ウジ虫)の期間に脱皮を2回経てからサナギになり、成虫になります。いったん成虫を増やすとネズミ算で爆発的に増えてしまいますので、幼虫の間に防除しておくのが最も効率的です。

気温の低い春は10日(夏場5日)かけて幼虫は成長し、その後10日(夏場3日)のサナギの期間を経て成虫になります。

成虫は主に水分の多い新鮮な糞に産卵しますので、生糞を水分の少ない堆肥に混ぜ、水分を減らすとともに60°C以上の発酵熱によって卵や孵化幼虫の死滅を図るようにします。

そのために、除糞と堆肥舎で行う最初3回の切り返し作業は、今の時期は10日毎(夏~秋は1週間毎)の間隔で行うのが最も適当です。堆肥の発酵熱が表層部を中心に切り返し後2~3日後にピーク温度に達し、その後徐々に低下することや、表層に産み付けられた卵が孵化して順次幼虫になることを考えると、今の時期の当初の切り返し間隔はこの間隔がベストです。

堆肥舎への移動、切り返し後に、堆肥の表面に脱皮阻害剤(ネボレックスやシロマジン等)を散布するのも有効な手段です。幼虫がすでに堆肥中に見られる場合、粒剤散布ではなく水に溶いて有機リン剤等も併用散布した方がまんべんに幼虫にかかり効果的です。

<二神>